

内村鑑三の聖書観

——福音的聖書論への序論的一考察——

橋本昭夫

一、福音的信仰と聖書論

聖書とは何かという問は、キリスト教信仰の不断の関心である。それは、キリスト教信仰における救済真理が、聖書において記されているという基本的な認識による。したがっていかなる神学的立場であるにせよ、それは同時にある特定の聖書観というものを内包している。さらに言えば、聖書観と救済の内容理解は、一応神学的作業においていわば抽象的に区別はされるけれども、それらは不可分の一体なのである。つまり、福音とは何かという問に答えることは、聖書とは何かという問に答えることにもなる。またその逆も真である。

このことは、日本の近代の教会史にあらわれて来る神学思想家の場合にも妥当する。植村正久、小崎弘道、海老名弾正、内村鑑三、また時を少し下って、高倉徳太郎の先達たちも、それぞれの聖書観を論じつつ、自らの信仰的確信を述べているのである。^①そして、明治初代のキリスト者たちの聖書観は、とくにその形式面においてきわめて似かよ

っている。このことは逆に言えば、彼らがそれぞれの性格・傾向から異なった強調点をもっていたとは言え、その基本的な信仰的・神学的関心においてはほぼ同一の立場に立っていたということの意味する。

近年、日本福音主義神学会において、聖書論が重要な関心のひとつとして取り上げられている中で、測りがたい信仰的遺産を今日まで残してくれた先達たちの聖書観を学ぶことは、福音的信仰の、この国における展開のために示唆するところが大であると思われる。本稿においては、とくに内村鑑三の聖書観に光を当て、聖書観と救済真理解の関係の一ケースを見ていきたいと思う。

周知のとおり、内村鑑三は聖書研究を畢生の事業とし、そのもつとも円熟した半生涯をそれに打ちこんだ人である。「聖書之研究」誌を三十年間にわたって続刊し、それを通して、彼自身の時代はもとより、今日に至るまで、直接・間接に多大な影響を及ぼしていることは、ここで言うまでもない。この事実から、現代のわれわれの福音的立場における聖書論論議に、積極・消極の両面にわたって、内村の聖書観は、聖書論に関する問題の諸相を映し出す鏡の役目を果たしてくれるということが容易に考えられる。

さて以下における考究の手順について若干述べておきたい。聖書論は、その上部概念である啓示論の中に位置づけられる。すなわち救済の真理は何であり、それがいかにして得られるかは、神の啓示による。したがって聖書の本質について論じることがそれが啓示論全体の中でどのように把握されているかを同時に論じなければならぬということとを意味する。実際、内村の場合でも、彼の聖書観は、人間はいかなる媒体を通し、またどのような方法で、神を認め救済の真理に到達するかという、いわば神学的認識論と密接に相関しているのである。それゆえ、以下において、内村の啓示論および神学的認識論の中での彼の聖書観を見ていくこととなる。そのあと、内村の聖書観そのものを見ていくがまず、彼がその形式面で何を言っているかに焦点をあて、さらに進んでその内容面について叙述を観察して

いきたいと思う。とくにこの後者において内村は聖書にあらわされた啓示の究極的内実を何であると理解しているかについて追求していくことになる。そして筆者はこの内容面の分析に本稿の最重点をかけるつもりである。

この意図の背後に筆者は以下のような問題意識を抱いている。すなわち、近代の聖書論論議において、聖書の真理性を、靈感を基礎とする不可謬性あるいは不可誤性などの概念によって、いわばアプリアリに、形式的に擁護しているかという傾向が前面に出ているがそれが果して福音の真理の闡明化に真実に寄与しているかという疑問である。つまり聖書の形式的論議的諸命題が支えようとし、また擁護しようとする福音の真理内容についての洞察が明らかでない限り、形式的論議は抽象化せざるを得ず、真の福音主義の確立に資するところが少ないのではないか、ということである。

事実、聖書を「神の言葉」として全幅的に受け入れている諸教会相互間において、聖書が、その究極的真理内容として何を伝えているかということに関して一致していない。そして真に「福音的」(エヴァンゲリッシュ)であるとの同定は、「福音」とは何かという救済真理の内実理解においてのみなされうと思われる。換言すれば、「福音的キリスト教」は、聖書は神の言葉であるという前提に立っているが、その逆は必ずしも真ならずということである。

内村の聖書論はその意味で興味深い。一般に内村の聖書論は、彼のキリスト教理解と並んでおおむね正統的であると見られている。しかし、往々にして矛盾する彼の神学的・信仰的言明を入念に読んでいくと、そう単純に彼が福音的であったと言えないと筆者は感じている。内村の神学もしくは信仰思想を真に理解しようとするれば、彼の矛盾すると見える思想的諸表明を総合的に考察し、その最終的関心がどこにあったかを見究めていかねばならないことは言うまでもない。したがって同様のことが彼の聖書観においても言える。その意味で、以下の叙述において幾分迂余曲折を経ることとなる。

最後の方法的注として、内村資料の膨大性とそこから来る手順上の困難性についてひとこと述べておきたい。内村は実に多面体で矛盾の人であると言われているとおり、彼の思想を整合的に描き上げるのはきわめて困難である。だが、このことは、彼の信仰思想が統一的観点をもたぬということの意味しない。筆者は、自らの研究を通して、内村の思想ははっきりとした一貫性を持ち、それを浮かび上げることが可能であると確信している。その一貫した思想の方向というものを究め、それが果して、「福音的」であり、またそれに相応する彼の聖書観が「福音的聖書観」であるか否かを判断していく資料を供していきたいと思う。^②

二、内村の啓示論と聖書観

明治の信仰の先達の思想は「前神学的」であったと言われる。それはまた、彼らが思いめぐらし、考え、記した所産が「信仰思想」と呼ばれる所以でもある。したがって、彼らの思想を扱うにあたって、高度に精密化した神学概念の諸範疇を用いることは、神学史的時代錯誤におちいる危険なしとはしない。それゆえ以下の論述において「啓示論」という神学範疇を用いるとき、それは本格的な啓示論への展開契機を内包している観点をも含んでいるということだとことわっておきたい。

明治の初期に似かよった精神的素養、また状況から入信した他の人物たち同様、内村も神の意志伝達が、啓示内容において、二様式をとっているものだと考えていない。つまり、内容面における、律法と福音の異なる啓示内容・啓示方法を認めていない。たしかに神の啓示の方法は一様式に限定されるものではない。多様な啓示の方式は相補的に働くものである。しかし、啓示の媒体は異なっても、それらは一様に同一・同質の神の意志が伝達されているので

あって、媒体相互間にその伝達内容に関し質的相違は存在しない、と見られている。

「真理の証人は三、すなわち、天然、人、聖書である。その一つについて正しい概念を得るために他の二つについて確かな理解をもたねばならぬ。三者は唯一なる永遠の知識の三位であり、唯一なる神の三重示顕である」。これは内村が、一八八五年、アメリカ・エルウィンで、自らの聖書のとびらに記した言葉である。同じ頃に認められた書簡の中で内村は、天然、聖書、人、とくに人の歴史にあらわれた「神の方法」について思いをめぐらし、谷間の百合、遊星、星座、また心にふれる繊細な感情が、人の心に語りかける神の声であるということを学べ、と書き送っている。^③この啓示の三位ともいべき、神の啓示の媒体としての、「天然、人、聖書」についての考えは、生涯、内村の思想を貫いている。内村にとって、健全な信仰は、これら三者によって与えられる啓示を総合的に受取ることによって築かれるものである。^④

このような啓示論的観点は、キリスト教信仰の本質理解にとってどのような方向を示唆しているであろうか。天然、歴史、聖書がそれぞれの方法において、それぞれの領域から質的に同一の神の意志を媒介しているとするなら、それはいきおい自然神学的・非弁証法的な神理解・人間理解に行きつかないであろうか。つまり、神の聖なる怒りと無条件の赦しの恵み、律法と福音の区別を究極的には飛びこえ、さらにはその対応である人間の実存的苦境を、またその深淵の事実を看過してはいないか、という問が起って来るのである。自然現象を通し、歴史的事象によって与えられる（とされる）神の使信は、聖書のそれと同一のものを伝えているのであるとすれば、原理的には、程度の相違こそあれ、天然・歴史を通して神の究極的意志を知ることができると結論せねばならないのではないか。もしそうであるならば、救いの認識は聖書以外にも知られることとなり、キリスト教の絶対性は消失していくことになるのではないか。これらの問が内村の啓示論の基本的立場から発せられるわけであるが、今から、天然、歴史、聖書が何

をそれぞれの究極的使信として、内村は考えているかを見ていきたいと思う。とくに最後の項である聖書については紙面を割いて考えていき、彼の聖書観と福音理解の相関関係を見定めたいと思う。

(4) 天然

天然は「物をもってする神の表現である」と内村は言う。逆に言えば、「神は天然の如きものである」のだ。ゆえに「人は天然を知って神を知ることができる」。しかも彼によれば、天然はただ単に神の外装のみならず、「神の心の物にあらわれたものである」。したがって、「天然の法則」は、神自身によって折々超越されるとは言え、神のみ旨をあらわすものであり、それはまたこの實在全体を支配している神の心のあらわれでもある。ここから、内村が終生奉じていた進化論も理解される。つまり、彼にとって進化論は、この實在の内的構造というべきものをあらわしている法則であったからである。「進化の道は、神がことをなしたもうの道である」と彼は言っているが、その根本的な實在理解を察する上で重要な表明である。

また内村は、「自然は大なる調和である」と考える。たしかに、彼も自然に一見修羅と思える現実のあることを知らないわけではない。しかしそれは浅く、また局部的な見方である。大局的に見、また深くさぐっていくとき、天然は大調和をあらわし、神の美しさを告知する。「もし見る目をもって見れば、天然は大著述なり。もし聞く耳をもって聞けば大教師なり。山あり、川あり、谷あり、木あり、草あるは……これみな神の聖意を伝うるものなり。すなわち第二（あるいは第一）の聖書なり」と内村は書いている。彼が自然をいかに重要であるか、また神の心の直接的なあらわれと見たかについて知らされる一文である。特に、「あるいは第一の聖書」の挿入は森羅万象を通して、神のみが伝えられるとの考え方が明確に出ている。

このように理解された天然が伝えるというその告知の内容は一体何であろうか。彼によれば、天然は神の「聖旨」を人に伝える。「天然の法則に従って歩みて、神と共に歩みつつある」のであり、天然は第二の聖書であり、第一の聖書、つまり書物としての聖書が「直ちに聖旨そのものを伝える」のに対し、それは「覚感（きやくかん）を通して間接に同じ聖旨を伝う」のである。以上の叙述から推論されるのは、ここでの「聖旨」というのは、「天然の法則」に見られるような神の意志、つまり原因に対して、結果がであるという因果関係であり、道徳的・宗教的に言えば律法ということだ。内村は、キリスト教を律法を示し、律法を成統せしめるものにとらえている。彼はまた、キリストも「天然の堅固たる土台の上に教理を築きたもうた」とも言っているのである。それゆえ、真摯に「天然」を学ぶことなしに、人は神の實在に到達できないと考えたのであった。

このように内村にとって、天然は聖書と並んで、世界宇宙と人についての神の「心」を伝える啓示なのである。しかも、それははからずも「第一の聖書」と呼びうるものと考えられるまでに、神の「聖旨」を明らかにするものと理解されているのである。天然はその美しさ、法則、またそこに見られる進化の歩みも、この實在における神の現実をあらわしているのである。

(5) 歴史

内村は、早くから歴史に多大の興味と関心を寄せていた。それは、歴史を通して人はいかに生きるべきか、さらにはこの生きている歴史がどこに行こうとしているのかを学ぶことができるからであったと思われる。その意味で、歴史学習は、自然観察の意図と重なりあう面をもつと言えよう。ただ内村の歴史解釈はその思想の成熟にともなって「神学的」に根拠づけられていくようになる。

歴史は「大文字にて書かれた真理」であると内村も考える。かつその「真理」というのは、宇宙は道德的実在であり、道德の法則が揺るぎなく支配している、ということである。それは、狭義には、「不義は永久に榮えず、正義は最終の勝利者である」ということだ。そしてこれこそが、歴史がわれわれに誤りなく伝えてくれる「大福音」であると内村は言う。むしろ彼の理解において、歴史の背後には神の支配がある。それゆえ、別の言葉でいえば、歴史は「大文字にて書かれたる神の摂理」なのだ。^⑧ 内村は、トーマス・カーライルの言葉に合わせて、「歴史も深く研究すれば聖書である」と判断するのでもここから理解される。人は歴史を学び、世界を支配し、それを導びいている神のみわざの法則を洞察していくべきなのである。と言うのも、そこにおいて、手にとるようにこの世界宇宙に関する神の「聖旨」を認識することができ、その中で個々の人間の天職を定めることが可能になるからである。

さらに歴史は、この宇宙人類における道德律の支配を客観的に提示するというのみならず、それはまた「人類進歩の記録」として、「上帝の摂理」を最も明瞭に示すものであるとされる。歴史は人類の「発育学」であって人類を低い道德的次元から高次のそれへと発育せしめようとする神のみわざの記録なのである。^⑨ このような内村の見方の中に、再び、彼が「天然」の中で認識した道德的法則の存在と進化論的運動と、「歴史」の中に与えられている事柄との重なり合いを見ないわけにはいかない。人にとって重要なことは、「天然」の中に働く法則を見究めることであると同時に、「人類進歩の原則を究め」、また「世界の進歩にあらわれた天の聖意を探」ることなのである。^⑩

このように、歴史においても神の「聖意」があらわれているというのが内村の確信であり、その「聖意」の内容は「天然」の指示するものと同じのものであった。以上に見たとおり内村の啓示の「三鼎足」の二つは、人間の歩むべき道を示すと同時に、宇宙・世界の完成という大きな枠組の中で、人類の道德的完成を示すものとしてとらえられている。この限りにおいて、「天然」と「歴史」は相補的に同一の「聖旨」を告知しているのであり、内村自身の言う

とおりである。

それでは、「三鼎足」のもう一つである聖書を彼はどのように見ているのであろうか。以上の叙述において、われわれはすでに、内村が「聖書」という語を派生的に、また広義に、「天然」にも「歴史」にも用いていることを見た。そこから内村は、同一の啓示内容を聖書にも見ていると思われるが、実際はどうであらうか。

イ 聖書

以下において、まず内村の「聖書観」の形式的側面を見、それに続いてその内容的側面を扱い、分析を試みたいと思ふ。

比較的初期の著作である「宗教座談」で、内村は「聖書の事」について述べている。それによると、聖書は「神の靈に感じた人」によって書かれたものであって、「神の聖意を人類に伝えんがため」、また「人類の救済に関する神の行動と順序を述べた」ものである。それはまた「キリストの伝記」として書かれたものである。さらにもっと一般的に「神について書かれた書」であるとも言われている。^⑪

ただここで目をとめておかねばならないのは、内村において神の「聖意」は聖書に限定されていないという観点である。たしかに、聖書は「神の意志、神の権能、神の慈愛というような事柄」について、「最も明白にまた最も真実に」教えてくれる書物である。^⑫ その意味で、天然・歴史より「聖旨」の伝達の明晰さにおいて勝っていると言えよう。しかしその「聖旨」の伝達は聖書独占ではないのだ。「宇宙万物はすべて神の聖旨を表出したもの」であるゆえ、「正確に天然物の事柄を写し出した書は確かに神の聖意を写したものである。その意味で、ダーウィンの「進化論」も「一種の福音」であり、同様のことが、孔子の「論語」、ワーズワースの「詩集」、カーライルの「仏国革命史」な

どについても言われる。^⑤ これらを深く学ぶことによって、人は「大能者の御心」を知ることができるのである。聖書は一書ではなく、「聖書、天然、歴史の三書」であるのだ。^⑥

ここから、内村の考えは次のようなものであるといえよう。すなわち、聖書において与えられている啓示内容は、自然的観察より与えられる教訓や、歴史的経験によって得られる認識を超えるものではなく、むしろそれらと質的同一性をもつものである、ということだ。これを見る限り、内村の聖書論は自然神学的・合理主義的啓示論の枠内にあると言えよう。

内村の聖書観の一般的な傾向は以上のようなものであるが、その細目はどのようなものであろうか。内村は包括的に聖書を「神の書」と呼ぶ。だがこのような一般的規定を超えては、彼の聖書観はきわめて流動的である。一方においては、保守的な立場を表明する。聖書は「神によりて書かれし書」で、「ある意味においては聖書の辞句的インスピレーションを信じる者」^⑦であると言う。また再臨運動擁護の最中に書かれた「聖書全部神言論」においては、「余は聖書無謬を信じる」、「四十年の信仰生活の結果、かく信ぜざるを得なくなった」と述べている。^⑧ 他方においては、彼は、「聖書は神の黙示にあらざるべし」と言い、^⑨ キリストを除く聖書人物・著者、すなわち、モーセ、ダビデ、イザヤ、エレミヤ、パウロ、ペテロ、ヨハネに誤謬があったゆえ「聖書はことごとく無誤謬ならず」と述べている。^⑩ 内村はこのように言って、聖書記者の筆になる救済真理内容のものにも誤謬があるということを示唆しているように見える。

内村の聖書観も、他の神学的諸観点と同じく流動的かつ一貫性を欠くように思われる。初期の内村の思想には、聖書の言葉を通して信仰が与えられるというのではなく、それとは別の領域における神との接触によって得られた信仰経験を確認するのが聖書だとする観点が見出される。彼によれば、いかなる書物であれ、われわれに新しい真理を教えてくれるのではない。有益な書物とは、「われわれの試験をもっとも多く確かめてくれたもの」であり、聖書がその最たるものであるがゆえに尊いのだと内村は考える。「われわれはまず直接神に聞かねば」ならず、「祈禱をもって直ちに神に接し、直ちに神の言葉を受け」ないならば、聖書が神の言葉であるということはわからない。つまり聖書は、直接的神経験の第二次的な確証を与えるという意味をもつものとして理解されている。^⑪

たしかに内村の思想の中で、聖書が「神の書」であり、神について無謬かつもっとも明確に真理を伝えるものであるとの見解が優勢であったように見えるが、他面、彼は、聖書も究極的には「文字」たることの限界を破ることができず、それゆえ、つまりは「殺す」ものであって、やがて自分の手から落ちてゆくべきものであると考えている。^⑫ 聖書からも自由になるということ述べているのだ。聖書もやはり究極的な自由をばむ拘束性をもつものであると考えられているからであろうか。

内村の正統的とも見える聖書観的言明の背後にこのような含みのあることを覚えておく必要がある。聖書の言葉が、その究極の内容において、罪人が決して手離すことのできない恵みのみ言葉であるとする「聖書のみ」の信仰とは、きわめて意味深い相違のあることが、ここからもうかがわれる。彼が聖書に見出した啓示内容が、原理的には、自然的・合理的なものであったがゆえに、聖書が「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったこと」を伝えるものであるとは考えなかったであろう。さて、それでは、内村の聖書の使信の究極は何であるか、と見ているのであろうか。もう一步踏みこんで考えてみたい。

「聖書の研究」とは、内村にとって、「神と万有とにかかわるすべての研究」であり、それゆえ、「キリスト」、「神」、「人」、「宇宙」、「人生」、「科学」、「歴史」、「詩歌と美術」に関する研究である。^⑬ 聖書が扱っているのは実に多岐にわたっているのだ。たしかに、内村の聖書研究の展望は、ここでも見るように広いのであるが、その中であつてもとく

に「罪のゆるし」、「キリスト」、「宇宙と歴史における神の聖旨の実現」という三つの主題が支配的である。しかもこの三者は、決して内的関連をもたぬものではなく、彼のキリスト教理解を反映しているように思われる。以下において、その三者を個別に吟味し、その内的関連をたずねていきたいと思う。

第一の点は、「罪のゆるし」である。内村は、聖書は罪のゆるしについて語る書であると言う。実際、「罪悪問題」ほど、人生における「大問題」はないのである。ただ「聖書」だけが「罪悪問題」を明らかに示す。そしてその「問題」が人の力によって解決され得ぬことを告げる点においては、聖書は「はなはだ無慈悲なる書」である。だが、聖書が罪を暴露するのは、罪のゆるしをもたらさんかためである。事実、「罪悪問題」の解決である罪のゆるしを、聖書以外において聞くことができない。罪のゆるしを宣言したもうのは神のみであり、それは「神の書」以外に聞くことができないのだ。それゆえ、罪のゆるしを伝えることが、「聖書の第一の目的」であると内村は言う。さらに、「聖書の聖書たるゆえんは、聖書は単に悪の原を解いてその艾除の道を備えずには「おかず」、「罪の消滅法」を教えるのである。」^⑧

以下の論議のために、ここで内村のいう罪のゆるしというものが、どのような意味をもつものであるかを見ておきたい。内村が贖罪信仰に固く立っていたというのは定説であり資料も多くそれを裏づけるように思える。しかし、内村の贖罪理解がどのような含みをもつものであったかを、ここで一瞥しておく必要がある。そのひとつは、彼が「罪のゆるし」において何を意味していたかであり、他はその贖罪に関する彼の考え・理解が、その「神学」全体においてどのような位置を占めていたかである。まず「罪のゆるし」であるが内村の関心が果して、字義とおりの「ゆるし」にあったかどうかは疑問である。と言うのは、「罪のゆるし」の関連の中で、彼はほとんど例外なしにと言えるまでに、罪を非存在化する語群を用いているからである。「絶滅」、「消滅」、「除去」、「根絶」、「抹殺」、「削除」など

がその例である。内村にとっては、「罪のゆるし」とは、罪を「艾除」することを意味していると思われるのである。すなわち、罪はただ単にそのゆるしを「宣せられる」だけではなく、その存在がなきものとされるといふことだ。したがって、この地上にあっては信仰者は「同時に義人にして罪人」であるという福音的信仰の基本認識は内村に稀薄であったと見える。

次に、この内村の「贖罪信仰」の彼の「神学」全体における位置であるが、それは信仰者が「完全」にされるべき、また「聖化」されるべきことの一前提であると理解されているということだ。実質的聖化への一段階として「贖罪」は必要であるが、「罪のゆるし」が福音の究極的な内容であるとは考えられていない。これは重要な点として留意される必要がある。

このように、内村によれば、聖書は、人間の力では到底解決しえない罪の問題の解決の道を示す。その意味では、天然・歴史のもたぬものを与える。しかし聖書のみ与えることのできる「贖罪」は、究極的なものではなく「聖化」もしくは「完成」への一段階と理解されるとき、聖書の究極の使信と、天然・歴史の使信とが重なり連なっていくように見える。ここでの分析をひとまず終えて、次に進んでいこう。

内村が聖書について語る第二の主題は、「キリスト」である。「聖書はその始めより終りに至るまで、キリストについて語る書である」と彼は言う。それゆえ、「聖書研究の目的はイエス・キリストを知らんがため」なのである。それはむしろ「贖い主なるキリスト」を知ることを含む。だが、その面における関りは内村において弱い。強調点は完全なる人、人間のあるべき姿を示している人というところに置かれている。いわゆる「クリストゥス・エクセムプルム」が究極の関心となっている。

内村は言う、人は聖書を学び、イエス・キリストを知る、そして彼にあらわれた「永遠の生命」を得ようとするの

だ、と。「永遠の生命」とは、「最高至善の生命」、「恒久不変の生命」、「人類宇宙通有の生命」であって最も高貴なる生命の意であると説明される。そして、イエス・キリストにこそこの生命は存在する。イエスの死後、千九百年間の世界人類における感化はそれを証明すると内村は見ている。その公生涯がごく短期間であったにもかかわらず、「人類の運命を一変した」イエスの生命の尊さを深く思うべきであると彼は言っている。このイエスの「完全な生涯、すなわち永生を知ることが聖書研究の目的である」のだ。

しかし、その反面、内村はキリスト認識を必ずしも聖書に限定しないとれる言明をしている。「キリストは聖書の精神であって、聖書以上」であり、「生きたキリストに接するまで聖書は死んだ書」である。ゆえに、聖書を理解するために、「聖書以外において生きたキリストに接し」、その後「聖書において彼に関する充分な証明を求むべきである」と内村は考えているのだ。④⑤ ここでも、聖書は信仰の直接的経験を確認するものと考えられている。「キリストは聖書を離れても実在したもう」と内村は言う。④⑥ たしかに書かれた文字としての聖書、書物としての聖書とキリストが同一であろうはずがない。だが、問題はなぜ内村があえてこれを言わねばならないか、その背後の信仰的関心である。内村に対して言うならば、聖書の言葉の告知するところを通してのみキリストが知られるとするのが、「聖書のみ」を強調する福音的信仰の立場ではないのか。だが、内村は「われら聖書を尊むの余り、生ける救い主を旧き文字の中に発見せん」と図るべきではないと主張する。④⑦ ところで、「聖書を離れても」知りうるキリストとはいかなるキリストであろうか。

もし内村が、「聖書以外において」生けるキリストを求めねばならぬとするならば、それは、キリスト論においても、聖書論においても独自の方向を示唆していると言われなければならない。内村の直接経験をたちあらわれるキリストとは、いかなるキリストであろうか。「われらはキリストを知らんと欲して聖書を学ぶ」のであるが、「人は必ずしもその発せし言葉ではない」し、また「そのなせし行」でもない、そうではなくて「その言葉と行為を通して伝わる精神」であり、「霊である」と論述される。④⑧ ここに内村の精神論的キリスト論が見られるとも言えようか。とにあれば、彼によれば、われわれが聖書に赴くのは、「キリストの精神を受け、その霊を受けんため」である。それが求むべきものなのだ。それゆえ、「定説と教義との供給者にあらずして、精神と生命の分与者たる」ことが、内村自身の願いなのである。④⑨ 「常に進まん」と欲し、「永久に進歩的」な「精神」こそ求むべきものであるなら、教説・教義の如何は問うに及ばずとされる。④⑩

以上に見たように、キリストにおいて求むべきが、もし高い理想を追い、進歩を求めていく精神であり、そこに重点がかけられているとするならば、キリストに見出される精神は、他の歴史上の卓越した精神と同一の質をもつものであると察せられる。キリストにあらわれている精神は、他の歴史上の偉大な人物の精神を比類なく増幅されたものであるというところに、キリストのキリストたるゆえんがあると考えられるのである。このように「クリストゥス・エクセムプ lum」に重点がかかるとき、キリストの意義の質的独自性が必然的に消失していく。内村が聖書とキリストをあえて分け、キリストの直接体験が第一次的なものとされる背後に以上のようなキリスト観があると思われる。さらに聖書がキリスト経験を生起せしめるものとしてではなく、むしろすでに生起したとされるキリスト経験を確認するものであるとの立場もここから理解される。

このような観点のもとでは、聖書もいきおい特殊なものを伝えるというのではなく、一般的・自然的な人間経験ももしくは認識を純粹化・明晰化したものであると考えられ、さらに聖書の特異的使信（「罪のゆるし」）が、第二次的なとき、一般的使信が主要なものと考えられるに至る。内村が、「聖書が始めから終りに至るまでキリストについて語る」というとき、それは人の罪のための「犠牲」としてキリストではなく、「模範」としてのキリストが究極

的関心事となっていることを見ておかねばならない。したがって、聖書も「贖罪的使信」を究極としているのではなく、「模範的・理想的使信」をそのように考えている、と結論しよう。

「キリスト」の項を終えて、第三の主題、「宇宙と歴史における神の聖旨の実現」を今から見ていきたい。聖書は「宇宙史」であり、その「成りし由来、その終局」を記したものであると内村は言っている^④。それはまた「宇宙人類にかかわる神の聖護の実現について語る歴史」なのだ^⑤。まさに神の歴史は、「大完成の日、しかし大完成の日、宇宙の完成、人類の完成、新天地実現の日」に向って行進している^⑥。内村は、「わが父は今に至るまで働きたもう」とのみ言葉をひいて、「ゆえに万物に進化」あり、「世に革新」あるのだと述べている。「神は行進しつつありたもう」からである^⑦。

このような楽観的歴史観は、内村の信仰思想の中枢を占めている。この宇宙・実在・人類は完成に向かわずにはおかない。宇宙実在の不条理は考えられないからだ。たしかに、第一次世界大戦の勃発は、それを覆えすかのように見えたがゆえに、彼に深い信仰的動揺をもたらした。しかし再臨信仰への目覚めがその危機から彼を救ったのであった。内村にとって再臨の日は、「大完成の日」である。彼は再臨信仰に彼の歴史観の保証を見出したのである。もし、「宇宙人類の完成」が彼の信仰思想の中枢を占めているとするなら、再臨信仰も、贖罪信仰をしのぐ中心性・究極性をもってはいるはずである。そのことを今少し見ていこう。

歴史の終局は「大完成」とする内村の信仰思想は、神が存在するという、存在の事実そのものによって根拠づけられている^⑧。神がいたもうということが、すでに慰さめに満ちた使信であるのだ。その意味で、創世記第一章第一節がそのまま福音である。そしてそれに呼応するかのようには、再臨の使信が、聖書が伝える「中心真理」であり、「最大の真理」であり、「最終の真理」であると言われているのである。内村の信仰思想を深く読んでいくとき、これ

らの言葉が、再臨運動あるいは論争の中で、はずみで語られた誇張であるとはいいたい。内村にとって、「贖罪の真理」はたしかに「再臨の真理」の前段階的性格をもつのみである。事実、受肉より十字架に至るまでの第一の来臨は、人間のかたくなな罪のゆえに、「美事に失敗に終わった」と見られている^⑨。換言すれば、救済は第一の来臨のときに終末論的に完成したのではなく、再臨をもって始めて完成するものと理解されているのだ。その背後にある考えは何であろうか。それは、世界人類の実質的完成なしには成就せずという、言ってみれば実証主義的（ポジチヴィスチック）な救済観であると思われる。だが、これは神の言葉の告知により信仰を通じてのみ救済の現実が知れるという観点の欠落を意味してはいないであろうか。すなわち救済はイエス・キリストの十字架と復活によってすでに成就し、それは一切の経験的事実の反論を超越し、かつその経験的事実の中に救済の現実を今、ここに現成せしめるという信仰的観点である。

以上から、内村の信仰思想において、聖書は人間性の完成をも含む宇宙・歴史の成就を告知する書、またそれを通して実在の有意義性を伝えている書と見られていると言える。しかも、これが人間がその存在において深い矛盾の苦境にあるという実存的関心よりも、むしろ楽観的な形而上学的関心につながってはいはしないかという疑問を呼び起こす。そしてまた内村の「キリスト論」において、「贖い主」よりも「聖め主」に最重点がかかっていることから裏づけされる。

この節において、われわれは、内村の聖書観と形式面と内容面とにわたって見てきた。形式面においては無謬・可謬に関して流動的であるという点に着目した。また、聖書と信仰成立の関係については、前者は後者がすでに他の領域において経験したものを確認するという観点は明瞭だが、後者を独占的かつ一次的に生起せしめるという理解が稀薄であるということも観察した。内容面で、三主要項目にわたって見てきたが、「罪のゆるし」は宣言的意味ではな

く、実質的除去という点を強調することによって、「完成」もしくは「聖化」の前提として理解され、「キリスト」は、「完成・聖化」の模範、またその実現の力を供給するものとして促えられ、そして第三の主題において人類をその中心的関心とする「宇宙・歴史の完成」を聖書の伝える「中心的真理」、「最大の真理」、「最終真理」として解釈されているのを見た。そして、「罪のゆるし」も「キリスト」もこの究極の使信に収斂していると理解することができるのである。しかもここに見られる関心は、換言すれば、人間の自己実現のためのものであると言える。筆者はここ内村鑑三の究極の関心事を見、かつそれが「自己に内向する人間」(ホモ・インクルヴァトウス・イン・セ)のあらわれがあるとして、福音信仰の立場から深い疑義を内村の信仰思想について感じる者である。

三、内村の聖書観とその福音理解

内村の聖書観を内容面において見るとき、きわめて重要なことが浮び上って来る。聖書はその告知せんとする使信において、特殊唯一の実体とはとらえられていないということである。その伝えんとするのは、究極的に道徳的・倫理的要素を濃く含む人類、歴史、宇宙の完成であって、それは「天然」も「歴史」もともに深く見れば伝えているのだ。その意味で、「聖書のみ」がキリスト教信仰のよって立つ真理を伝えているのではない。それゆえ聖書を排他的に唯一の啓示の書とし、そこにのみ「神の聖旨」を読もうとする態度は均衡を欠くものとして退けられる。

聖書は、たしかに、内村にとっても「神の書」であり、「ある意味においては辞句的インスピレーションも信じ」ることのできるものである。しかしそれは言うまでもなく宗教改革的意味における「聖書のみ」とはそのまま連結しない。宗教改革の神学において、「聖書のみ」はカトリック神学における伝承優位に対立してかけられたものである

が、その深い動機は「イエス・キリストにおいて啓示された神の恵み」が一切の人間の思弁・思想に対立して、「聖書のみ」知られるという主張であったのである。したがって、「聖書のみ」は決して独自の概念範疇ではなく、「キリストのみ」すなわち「恵みのみ」に密接・不可分の対応をなしているものなのである。しかも、その「恵み」というのは、人間が深い罪のゆえに不断に背負っている苦悩の中に、常に新しく、また人間の経験的諸現象を貫通して語られる「罪のゆるしの恵み」なのである。まさにこの恵みにこそ、「同時に義人にして罪人」である信仰者にとって失うことのできない「福音」なのだ。

たしかに内村も「罪のゆるし」を聖書の主要使信のひとつであると見ていたが、そこが人間の全実在がまったく新しい現実の中に置かれ、展開されるべき不断の原点であるとは理解されていなかった。彼にあっては、罪の理解が道徳的・倫理的な次元で考えられていたため、その神学的深淵にまで到達し得なかったと思われる。福音とは、宗教改革の信仰によれば、神が「罪人」をなおも「罪人」としてとどまるその状況の中で、キリストの贖いのゆえに「義」と見なし、そう宣言されるということだ。救済の使信の究極点はここにあり、「聖化」と一般に言われている諸変化は「義認」の目的ではなく、あくまでもその派生的事実であって、救いの内容の究極ではない。この観点は、人間が「聖化」の恵みによって主張されるような楽観的状况の中にいないこと、またさらに神との人格的交誼に回復されることこそが救済そのものであるという認識を前提としている。

内村の罪理解が神学的なものであるというより、道徳的・倫理的なものであったがゆえに、「義認」的恩恵を究極のものとして受け得なかった。内村にとっては、実際にこの自分が「義となる」という「成義」こそが救いの内実であったのである。しかし、人間がその実存の実相というものを深く洞察すればするほど、「聖化」論議で云云される現実とはいかに隔絶したものであるかを見させられる。そのような状況にあっては、「聖化」をその内容とする「福

音」は、律法的にならざるを得ない必然性を内包している。内村のキリスト教理解がその基調において道徳的・律法的であるのは、以上のような理由によるものと思われる。

このように内村が、聖書を天然・歴史に相並ぶ同質の真理を伝達する一啓示媒体と見ているとき、それは同時に自然神学的、したがって律法主義的なキリスト教理解に立っていたことを示している。それはまた内村の先入的キリスト教理解が聖書観、ひいては啓示論を決定していたとも考えられる。その意味で内村の啓示論における聖書観は、福音的聖書観と同一の軌道にあるとは言いがたい。「罪のゆるし」の中に福音の真理の究極点があるとすると宗教改革的、とくにルターの立場から言えば、福音の真理の把握をその原理において不可能にするものであると言えよう。

四、結 論

内村の聖書観の解剖を試みて、福音信仰の真の闡明化は、聖書論の形式的側面からの接近では果し得ないことを見た。筆者の理解するところでは、靈感、無謬性、不可誤性などめぐる形式面論議は、福音主義を標榜する教会において「福音」の本質の何であるかについて一致があるということが前提にされているようである。聖書論の形式的側面の明確化に成功すれば、福音の真理の擁護がなされるとの考えがあるようである。しかし、それが事実でないことは、「福音主義教会」において福音とは何かについて必ずしも一致があるわけではないという事情がそれを物語っている。

内村の聖書観批判において、われわれが試みたように、「福音主義」の明確化は、聖書において福音とは何であるかと告知されているか、その究極的な救済内容は何かという、聖書論の内容的側面からの作業が先行しなければならぬと思われる。本稿においても、筆者は、折々断片的に自らの属するルターの立場からの福音の内容についての理解をさしはさんで来たが、さらに緻密に「福音」の本質について考究を深め、不断に明文化を試みていく必要がある。その果せるか否かによってこの国における「教会が立ちもし倒れもする」からである。またそこにおいて始めて、現代の実存的諸問題が福音の光のもとにおかれ、その何であるかが同定され、それによって福音を真に福音として現代世界に現実化し、宣教していくという「福音主義」の任務の遂行が可能となるのである。さらに、福音の内容に規定された福音的聖書論もそこから明らかにされ、福音の真理の闡明化に仕えるであろう。ただ、福音的聖書論の展開そのものは後日にゆずらねばならない。

注

- ① 熊野義孝「日本キリスト教神学思想史」、新教出版社、一九六八年、植村、小崎、海老名それぞれの聖書観が、二四〇～二四一、一六三、一七三頁に引用されている文によって垣間見ることが出来る。高倉については、彼の「福音的基督教」、長崎書店、一九三〇年、第一章参照。福音的に深化された聖書観が述べられている。
- ② 「その表現の完否は別として、真正の著書は必ず終始一貫した思想がある」と内村は言っているが（教文館版「内村鑑三注解全集」第八巻、二九九頁）、これは内村自身ともあてはまる。なお内村資料は教文館版を用い、「注解全集」は「注解」、「信仰著作全集」は「信仰」、「日記書簡全集」は「日記」、「英文著作集」は「英文」と略し、八・二九九はそれぞれ第八巻二九九頁であることを示す。

③ 岩波版「内村鑑三全集」、一九三三年、第二〇巻、一六八頁（原文英文）。

④ 「信仰」七・二二九。

⑤ 同九・六四―六五。

- ⑥ 同一五・二三七。
- ⑦ 同一〇・二五二。
- ⑧ 同九・六五。
- ⑨ 同一〇・二七九。
- ⑩ 「日記」四・三六五。
- ⑪ 「注解」八・五七参照。
- ⑫ 「信仰」一五・二六三。
- ⑬ 同六・二〇五。
- ⑭ 同一・二〇五。
- ⑮ 同四・二〇九―二一〇。
- ⑯ 同三・二八七。
- ⑰ 同三・二二一。
- ⑱ 同三・二二二。
- ⑲ 同一・二二七。
- ⑳ 同九・六五、「注解」六・八参照。
- ㉑ 「信仰」七・一一〇。
- ㉒ 同三・二二〇。
- ㉓ 同一・九一。
- ㉔ 同七・二一四。
- ㉕ 同七・二一一。
- ㉖ 同三・二二四。
- ㉗ 同一〇・一〇七。
- ㉘ 同七・一一五。

- ㉙ 同一・六〇―六一。
- ③〇 同一・九七。
- ③① 同一・一七〇。
- ③② 同一・六一。
- ③③ 内村の罪悪観・救済観については、今秋発行予定の神戸ルーテル神学校神学誌第七号に執筆の予定である。詳細な論議はそこにゆずれない。
- ③④ 「信仰」七・一〇四。
- ③⑤ 同一・一六四。
- ③⑥ 同一・一六五―一六九。
- ③⑦ 同七・一〇四。
- ③⑧ 同七・一〇六。
- ③⑨ 同右。
- ④〇 同一・一五一。
- ④① 同七・三二〇。
- ④② 同八・二二〇。
- ④③ 「注解」一・七。
- ④④ 「信仰」一・一〇六。
- ④⑤ 「注解」一七・六三。
- ④⑥ 「信仰」一六・一六一。
- ④⑦ 「英文」四・一一八。
- ④⑧ 「注解」一四・七三、「信仰」一三・三三三、同三・二六、同三・五八参照。
- ④⑨ 「信仰」一三・六五―六七。

(神戸ルーテル神学校助教授・近畿福音ルーテル東垂水教会牧師)